

趣旨説明

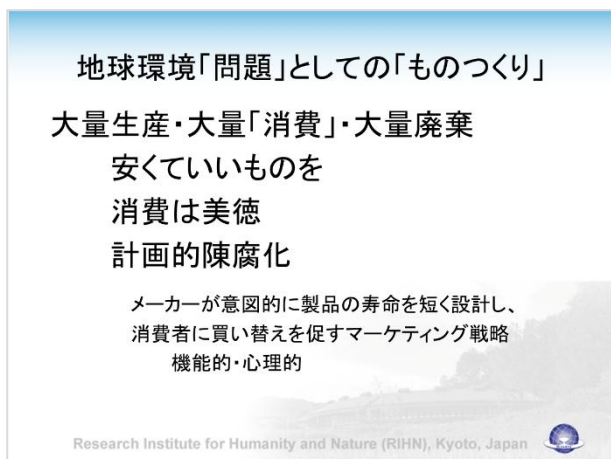
総合地球環境学研究所

名誉教授 阿部 健一



総合地球環境学研究所の阿部です。趣旨説明をいたしたいと思いますが、大切なことはもうすでに岡橋理事長のほうから述べられているようです。思い返しても関西万博、正直申し上げて私も当初は批判的というか、なぜいま頃やらなければいけないのだという疑問がありましたが、何度か通ううちにそういった疑問というのは吹っ飛んでしまいました。やはり、未来に向けたものづくり、それを考える大事な場であったかと、そのように思います。

今回、まさに同じ年、この環境シンポジウムで、ものづくり、未来のものづくりについて考えるという、そういったテーマで、この環境シンポジウムを開催することになりました。



趣旨説明、できるだけ簡単に話をしていきたいと思います。

地球環境問題としてのものづくりという言い方をしました。問題のところにカッコを入れております。実はあとで申し上げますが、どうしても地球環境という問題という言葉がすぐあとについてきます。実際に、いま地球は大変なことになっています。本当に問題だけです。ただ単に地球環境問題を解決する、そのために何か、こんなこともあんなこともやらなければいけないというだけでは、将来に向けて豊かな世界、豊かな社会というのはなかなか実のところできない、そういったことがわれわれの考えの基本にあります。問題解決ではないのです。新たな価値の創造です。より豊かな社会を目指してみんなで知恵を絞る、それが最も大切なことかと、そのように思います。とはいえ、まずは問題を指摘しておきます。問題、とりわけものづくりに関してだと、この言葉がすぐ思い出されるのではないかと思います。大量生産、大量消費、そして大量廃棄です。これがまさに問題の核心であります。安くていいものをというのを、ついついわれわれは求めてきました。

かつて、消費は美德というような言い方もされてきました。経済白書に昭和34年だったか、正確な年代を忘れましたが、このような言葉、消費は美德というのを取り入れられている高度経済成長期の話です。消費という言葉、英語のコンサンプションの和訳ですが、字面を見てもなかなかどう思いますかね。消費して費やす。語源の英語の方は、「使い尽くす」。肺病という意味もあります。肺を使い尽くして消耗し、そして病気になる、そういったところでしょうか。

消費について考えなければなりません。言葉自体もそうですが、なにより言葉の背景にある、われわれ自身の考えも変えていかなければいけないということです。

一つ例を出しましょう。計画的陳腐化という言葉をお聞きでしょうか。メーカー、企業の方にはなじみがあるかもしれません。メーカーが意図的に製品の寿命を短くするのは、長くではないです。できるだけいいものを長く使うのではなくて、すぐそれが飽きられるように、あるいは場合によっては壊れてもいい

ようにします。そして常に新しい製品をどんどん作り、買い替え、消費してゆくようにする、そのための計画的陳腐化です。

さあ、どう思いますか。パソコンなどもそうなのですが、パソコンだけでなく、自動車、ファッション、少し新しいものが入ってくると、つついそちらのほうに手を伸ばしてしまう。こういったことを含めて計画的陳腐化と言います。心理的陳腐化という言い方をすることもあります。どんどん消費を刺激していきます。いろんなものを消費しながら、自分たちの社会が豊かになってきていると勘違いしてしまってきています。そのことについて、今日のシンポジウムでは、それでいいのだろうかということを少し考えていきたいと、そういうふうに思います。

地球環境「問題」としての「ものづくり」

大量生産・大量「消費」・大量廃棄

コンビニ・ストア 24/365 日本的

POSシステム：消費者のニーズに細かく対応

生産年月日⇒賞味期限

……変わりつつある

地域の豊かさを考える
消費者も

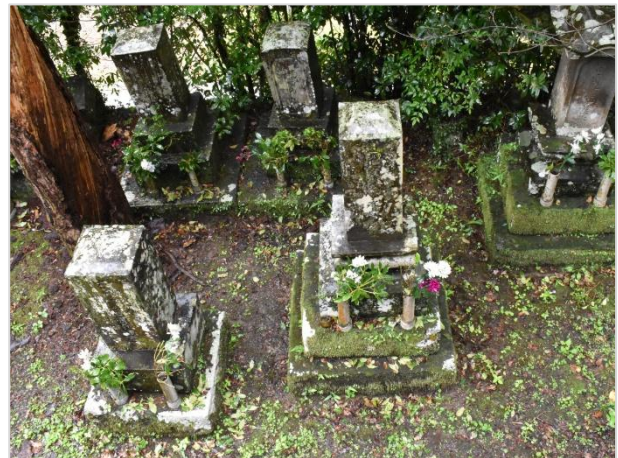
Research Institute for Humanity and Environment (RIHN), Kyoto, Japan



関連するものとして挙げておきたいのがコンビニエンスストアです。コンビニエンスストアというのは本当に日本的なものです。もともとはアメリカが発祥の地と言われますが、いまのようなコンビニエンスストアになっているのは日本でさまざまな工夫がされているからです。24時間365日、店が開いている、まさに便利な店ということです。ここではPOSシステムと呼ばれるものに注目します。あの少ない小さな店舗面積であるにも関わらず、いつ行っても欲しいものは必ず手に入ります。これはどの時期にどういった商品が売れるかというのを中央のほうできちっとデータ管理をしていて、そして消費者に本当にかゆいところに手が届くようなかたちで製品、商品をコンビニエンスストアの店舗に並べることができるという、そういった見事なシステムです。そういったものを日本で開発して、コンビニエンスストアにはいつ行っても欲しいものが手に入るということになっています。そして、コンビニエンスストアで一番大きな問題となっているのは弁当や食品の大量廃棄ということです。この「廃棄」に関しては、ちょっとした製品に関わる属性の表記の仕方の変更が関わっています。覚えていますか。昔はいろんな製品、

例えば牛乳など、かつては生産年月日が記されていたはずなのです。それが消費期限、賞味期限が記されるようになってきました。昔はその生産日を見て購入していました。飲めるか飲めないかの判断は、消費者である、われわれ一人一人が行っていました。いまは違います。賞味期限、消費期限が切れたら廃棄する、自動的にそういったこととなります。

コンビニストアについて、もう一つだけ言っておきます。これは昔15年以上前に聞いた話ですので、いまは違っているかもしれません。当時、食品の6割くらいの商品が3カ月くらいで入れ替わっているというものです。特にビールやポテトチップス、チョコレートなどです。期間限定や地域限定なども含めて、常に新しい商品が出ているからです。私も、食べたことがないポテトチップス、飲んだことがないビールが並んでいるとついつい買ってしまいます。そういう具合に消費を刺激されてきています。コンビニエンスストアというのはまさに日本の消費、それを具現化しているような場所です。ただ、いまは、コンビニエンスストアも少しずつ変わりつつあります。どんどん地方に進出して、そして地域の豊かさを考えるようになっていきます。



一方で、われわれ消費者のほうの意識はどうなっているでしょうか。少しそれのことも考えていきたいと、そのように思っています。

ここで「ものづくり」に遠くから関わる話を挿話的にしておきたいと思います。

このあいだ、宮崎県の高千穂、椎葉山地域に行ってきました。日之影町というところの、わずか7軒の集落です。雨の中お墓を見ていたら、添えられた花もその雨の中で生き生きしていると思って見ていました。しかし、実はこれは本物の花ではなくプラスチックの造花なのです。



そのあと道の駅に行ったら花柴と神柴が売られていました。神柴は神前に捧げる神、花柴は仏前に供える檜ですね。興味深かったのが、バケツに生けられているのはプラスチックの造花です。なんだか少し嬉しかったのですが、わざわざバケツに水を張っていました。なぜプラスチックの造花をわれわれは大事なお墓に備えているのか。色褪せないし、しょっちゅう取り替えなくてもよくて便利です。今日提さんに漆について話を伺いますが、漆器もプラスチックにとって代わられました。われわれが生活の中で、何を大切にすべきかなければならぬのか考えさせられました。

地球環境「問題」としての「ものづくり」

大量廃棄

たとえばマイクロプラスチック

「ごみ」：溝にたまる泥：落葉

いつどこでごみになるのか

鶏糞

Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan

大量破棄の問題で、プラスチックとなればマイクロプラスチックです。いま、大きな問題となっています。しかし、ゴミというのは本来どういった語源かという、溝に溜まっている泥のことで、そして、その泥はどこから来ているのかと思ったら、落ち葉から来ています。この溝に溜まっている泥というのは栄養豊かな泥です。ということで、大切な肥料にもなるものです。何が言いたいのかというと、あらためて、いつゴミになるのか考えてみませんか。どういう過程でゴミがゴミになるのか。僕はゴミと言っている、そのゴミとは一体何か。そういったことを少し考えてい

きたいと思います。

いきなり鶏糞という言葉を出しました。日本のいまの養鶏、ものすごく狭いところで鶏が飼われていて、そして餌を朝昼晩、文字通り食べさせられています。当然、糞をします。その糞というのは貴重な肥料となるのです。しかし、日本ではほとんど使っていません。どこに行っているかというと、フィリピン、東南アジアです。その農民にとっては、日本の鶏糞ほど栄養豊かで作物の成長に大切なものはないということで高く取引されています。しかし、日本だとそれは産業廃棄物といった扱いになっています。こういったことも、今日のシンポの背景にあり、少し考えるヒントになるのではないかと思います。

地球環境「問題」としての「ものづくり」

これから我々はどう「もの」と向き合い

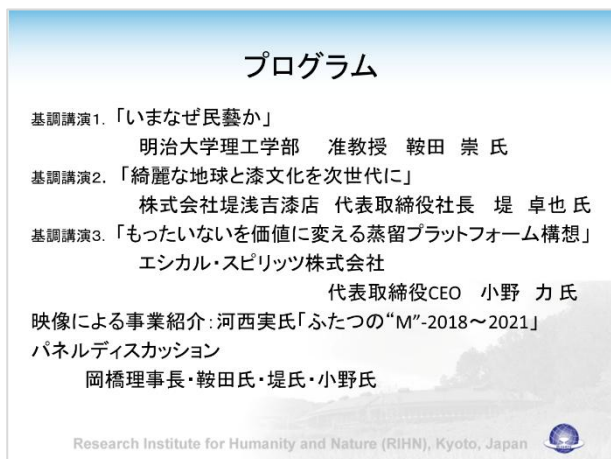
どのような「ものづくり」をすればいいのか

何が大切なのか

問題解決ではなく新しい豊かさを考えたい

Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan

地球環境問題としてのものづくり、環境問題の中でのものづくり、大量生産、大量消費、大量廃棄、さらっと見てまいりましたが、何を考えないといけないかという、これからわれわれはどうもの向き合い、どのようなものづくりをすればいいかということです。未来志向です。問題はいろいろあります。先ほど冒頭に言いましたように、問題を解決することを考える、これは大事なことではあります。しかし、少し一歩下がって、その延長線上にもっとより豊かな社会、世界、それを思い描きながら、どのようなかたちで物を作っていくのか、それを考えていきたいと思っています。新しい豊かさ、これまでとは違う新しい豊かさ、それを考えるということが、本日のこのシンポジウムの目的ということになるかと思います。



ます。少し長くなったかもしれませんが。私のほうの趣旨説明、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(終了)

プログラムは先ほどご紹介がありましたので省きます。鞍田さん、いまなぜ民藝か。いまなぜというのは、今年民藝という言葉ができて 100 年だったと思います。ちょうど 100 年、その節目で民藝、その中から何を鞍田さんが取り出してくるのか少し楽しみです。それと、堤さん。京都にあります漆問屋と言ったほうがいいですか、そこの若き社長さんです。私は年若い堤さんに教わる事が多くて、今日もどんな話をされるのか楽しみです。そしてお三方の中では最も若い小野さん。エシカルスピリット、ジンの話をされると思います。小野さんの話を聞くと、ゴミとは一体なんなのだろう、廃棄物とは一体なんなのだろう、そこから何を作るのか、新しい価値をどうやって生み出すのか。すんなりはいかなかったと思いますが、小野さんの起業にあたっての話を聞けたらと思います。それと、お三方の話を聞いたあとで、われわれりそなアジア・オセアニア財団の環境事業の中から、一つものづくりに直結している事業、もう既に終了した事業ですが、そちらをぜひ紹介したいと思います。河西実さんがやられていたプロジェクトで、フィリピンのアバカというバナナに似た植物、その繊維を使って地域の豊かさを考えながらものづくりをするという、そういった試みでした。今日、後ろのほうに作品、商品が並んでおります。そしてデザイナーの井澤さんにも来ていただいております。残念ながら、本当はこの場に来ていただきたかったのですが、河西さん、2 年前にお亡くなりになりました。映像というかたちで、その活動をご紹介することになります。

最後はいつものとおりパネルディスカッションです。さあ、どんなパネルディスカッションになるのか、私自身楽しみです。まず岡橋理事長にもぜひ、今回パネルディスカッションに加わっていただいて、りそな銀行としてのものづくりの支援、そういった話を冒頭にはぜひしていただきたいと、そのように思ってい